

シェイクスピアの研究

中野春夫

2014年度はシェイクスピア生誕450周年にあたり、研究と上演それぞれの領域でさまざまな記念企画が催された。シェイクスピアを中心とするイギリス（イングランド）演劇文化が現代社会でしっかり根付き、力強く支えられていることを改めて実感できた一年である。疑いなく研究成果も質量ともに大変充実していたと思う。

まずは刊行順で単著の紹介から。西野義彰『シェイクスピア劇の道化』（英宝社、2014年4月）は「道化」を幅広く解釈することにより、フォールスタッフやボトム、ドグベリーも含めシェイクスピア劇の喜劇的登場人物とその役割を網羅的に分析した労作である。タイトルは従来の文化人類学的な成果を予想させるが、本書の意義は喜劇的な場面における「道化」たちの台詞および行動の丹念な分析にあり、重要な脇役としてフォールスタッフたちが果たす役割に議論を集中させる点は一種の作劇術論になっている。

大谷伴子『マーガレット・オブ・ヨークの「世紀の結婚」——英国史劇とブルゴーニュ公国』（春風社、2014年9月）はマーガレット・オブ・ヨークの興入れ以来築かれたブルゴーニュ公国との政治経済的、文化的交流に注目し、シェイクスピアの英国史劇をブルゴーニュ公国の表象から読み直しうる可能性を提示する野心的な研究である。英国史劇そのものの分析をより充実させればさらに刺激的な議論が可能だったように思えるが、文化史と社会史のさまざまな成果を駆使してネーデルラントや金融市場、毛織物交易など魅力的な論点を次々に繰り出す展開は華麗である。

勝山貴之『英国地図製作とシェイクスピア演劇』（英宝社、2014年11月）は16世紀後半期における地図製作への関心に焦点を当て、その関心の基底にある経済的・政治的欲望をフィルターとしながらシェイクスピア劇の再解釈を試みる重厚な成果である。地図製作や地誌の解説・分析だけでも第一級の成果であるが、本書最大の魅力は地図関連の解説を面白く読ませながら、シェイクスピア劇において地理関連の具体的なイメージや小道具としての地図がどのような効果を持ち、何を表現する（した）のかを明快に教えてくれることにある。王権寄りとロンドン商人寄りの対照的な二種類のロンドン地図を使いながら『コリオレイナス』における貴族と民衆それぞれの利害言説を視覚的に説明していく第5章は作品論としても見事。

佐野隆弥『エリザベス朝史劇と国家表象——演劇はイングランドをどう描いたか』（九州大学出版会、2015年2月）はタイトルこそエリザベス朝史劇としているが、分析対象となる「史劇」は国家の歴史や制度に言及している劇作品を網羅的に含むので、

事実上同書は16世紀から17世紀前半期までを対象として国家表象の変遷を分析する壮麗なイングランド演劇史研究である。16世紀初期・中期の「歴史劇の祖型」(第1章)から「チャールズ朝の歴史劇」(第10章)まで章ごとに年代とトピックが設定され、さまざまな国家表象スタイルが緻密に論じられている。どの章も歴史劇関連の重要な情報に満ちており、通読すれば国家表象(意識)の中世的パラダイムが近代の枠組みに吸収されていく大きな歴史的流れが鮮明に浮かび上がってくるはずである。

本多まりえの *Henry Chettle's Careers: A Study of an Elizabethan Printer, Pamphleteer, Playwright* (Eihosha, 25 Feb. 2015) はエリザベス朝の出版文化の真只中で活動したヘンリー・チェトルの業績を網羅的に扱った意欲的な成果である。チェトルは「成り上がりものの鳥」の当てこすりて有名なグリーンのパムフレットの印刷業者であり、主にシェイクスピアとの謎めいた関係から知られてきたが、本書はチェトルのパムフレット作者および劇作家としての多様な経歴全般を政治・宗教思想、軍人文化、貧困問題など同時代の社会背景からダイナミックに解きほぐす。印刷業者として手掛けた出版物を網羅的に解説する第1章は資料として有益であり、エリザベス朝文学における軍人表象を文化史的に分析した第6章も面白い。

もう一点、非売品のブックレットであるが、重要な単著の成果として取り上げたいのが金子雄司『シェイクスピアの「原作」——二〇世紀シェイクスピア本文批評の歴史』(中央大学人文科学研究所, 2014年3月)である。本書は35ページの紙面でこれ以上分かりやすく、かつ面白く説明することは不可能と思われるほど見事に本文批評研究のこの百年間に起こった激動の歴史をたどっている。評者自身もその一人であったことを正直に告白しておくが、「書誌学」、「本文批評」、「テキスト(本文)」の関係が今一つ確信できない研究者には必読の一書であり、書誌学が文学研究全般にはたしてきた礎の役割を改めて気づかせてくれる成果。

一般読者を対象とする成果も充実した一年だった。前沢浩子『NHKカルチャーラジオ/文学の世界・生誕450年シェイクスピアと名優たち』(NHK出版, 2014年7月)は13回にわたるラジオ講座のテキストであるが、シェイクスピア作品の魅力を手際よく伝えてくれる入門書であると同時に、各回でその作品を演じた代表的な名優を舞台裏の逸話などを含めて紹介してくれる点、俳優関連の情報源の宝庫としても有益。河合祥一郎『NHKテレビテキスト100分 de 名著・シェイクスピア「ハムレット」』(NHK出版, 2014年12月)は25分4回で名作を解説するNHK人気番組のテキストであり、難解な『ハムレット』の見どころと論じどころをしっかりとツボを押さえつつ、独自の解釈を盛り込みながら豊富な図版で分かりやすく解説していく。

石塚久郎責任編集『イギリス文学入門』(三修社, 2014年6月)はタイトル通り英文科学生を対象としたイギリス文学全体の入門書であるが、優れた執筆陣によって代表的な作家やイギリス文学の重要なテーマが要領よく紹介されている。第2章16世紀

回顧と展望

では西能史(フィリップ・シドニーその他)と由井哲哉(ウィリアム・シェイクスピアその他)、第3章17世紀では富樫剛(ベン・ジョンソンその他)と末廣幹(アフラ・ベインその他)がそれぞれ専門知識を生かした情報を提供してくれる。

本年度はジャンルや時代を超えた越境的な論文集が何点か出版され、そのなかに16・17世紀イギリス(イングランド)演劇に関する優れた成果が含まれていた。刊行順に紹介するとまず富樫剛編『名誉革命とイギリス文学——新しい言説空間の誕生』(春風社、2014年8月)に手厚い議論が光る佐々木和貴「舞台の上の名誉革命——トマス・シャドウエル再考」が収録され、川成洋・吉岡栄一共編『英米文学にみる仮想と現実——シェイクスピアからソロー、フォークナーまで』(彩流社、2014年10月)にはチャールズ・モウズリー「誰が『シェイクスピア』を書いたのか——劇の誕生と再生産過程」、伊澤東一「シアター座のこと——シェイクスピアの初演劇場」、須田篤也「“パンチ”とは何か——『パンチとジュディの人形劇』に関する考察」が掲載されている。

同じく植月恵一郎・廣本和枝共編『文学と歴史の曲がり角——英米文学論文集』(英光社、2014年11月)には16・17世紀演劇関連で中堅と若い世代の研究者による先端の研究成果を踏まえた力強い論考5点が収められている——廣本和枝「ジョン・ペイルのインターロード『ジョン王』——歴史とモラルィティ」、和治元義博「アーデンの死が意味するもの——『ファヴァシャムのアーデン』を読む」、大住有里子「『お気に召すまま』におけるロザリンドとエリザベス一世」、松岡浩史「王権と魔女——『マクベス』における歴史のアナモルフオーシス」、間瀬裕子「十六世紀末と君主交代——革命前夜のイングランド」。

また富士航・服部典之・岩田美喜・小林亜希共編『フィクションのポリティクス』(英宝社、2015年3月)に富士航のアフラ・ベイン論「『ある貴族とその妹の恋文』における二重のポリティクス」が掲載されている。『關大英文學——坂本武教授退職記念』(2015年3月)には近代初期演劇関連で、視点が面白い以下の5点が収録されている——若狭智子「フェンシングの流行の変遷とマキューシオの死」、スミザース理恵「演劇的デバイスとしてのクラウン——フェステ」、浦千里「*Shakespeare's Sonnets*のバラの表象——詩人の心の表象」、吉村征洋「『ソネット集』に内在する政治的メッセージ——エリザベス朝政治的コンテクストの視座から」、鈴嶋梓「『冬物語』における音楽の特徴」。

昨年度、日本シェイクスピア協会会報 *Shakespeare News* が新たに総合学術雑誌 *Shakespeare Journal* へと生まれ変わり、創刊号(2015年3月)は特集企画〈生誕450周年——シェイクスピアの作品の魅力再考〉を組んで3本の論文と1本の演出ノートを掲載した。井出新「シェイクスピアと「死んだ羊飼ひ」——『お気に召すまま』における牧歌的世界の喪失」はアーデンの森で繰り広げられる人間模様とシェイクスピア自

身が身を置いていた演劇界との共通項を華麗に論証しつつ、『お気に召すまま』における「死んだ羊飼ひ」マーロウの隠れた影響を明るみに出す。高森暁子「装う者たち——『じゃじゃ馬ならし』と衣装のポリティクス」は『じゃじゃ馬ならし』の劇世界における未婚者たちの社会的役割の獲得過程を衣服の欲望のコントロールという斬新な切り口から明らかにし、この劇最大の論点である「飼ひならし」解釈に有力な視点を与えてくれる。竹村はるみ“Sweet issue of a more sweet-smelling sire”——スペンサーのアドーニスと『ヴィーナスとアドーニス』は「父親の出産」という奇想的比喩に着目し、シェイクスピアの「創作／詩人」表象がスペンサーの影響のもとにどう生み出されたかをルネサンス期の神秘主義的脈絡でダイナミックに論証した論文。河合祥一郎の演出ノート「*Much Ado about Nothing / Noting* における“noting”の構造」は著者が企画した公演（2014年4月）に基づいて執筆されたもので、『から騒ぎ』における「認識する（noting）」ことの不確かさを実際の舞台と上演ノートで表現することにより、上演研究と作品研究との互恵的な関係が今後どう結びうるか身をもって示した論考。

Shakespeare Journal 創刊号では上記の特集以外に通例の掲載論文を2本収録しており、そのうちの1本である高橋三和子「初期近代イングランドのヨーロッパ旅行記における異国の描写——トマス・コリアットの「珍品陳列室」」は16世紀初期に書かれたヨーロッパ旅行記の記述スタイルに注目し、同時期の珍品コレクション熱との文化的関連性を指摘してくれる。石橋純二‘On the Source Issue of *King John* and *The Troublesome Raigne of John, King of England*’は今日まで未決着の *King John* と作者未詳の *The Troublesome Reign of John King of England* との影響関係問題に関し、先行研究の論点を丁寧に整理しながらイングランド裁判制度に関する専門的な知識を駆使して新たな可能性を提示する成果。

Shakespeare Studies, Vol. 52 では本多まりえの‘Chivalric Soldiers and Merchants in *Henry IV, Parts 1 and 2*’が『ヘンリー四世・二部作』において騎士道的な美学が金銭的比喩で表現される場面を丁寧に検証し、1590年代の芝居小屋が「戦う」エリート伝統的な名誉観を同時代の「働く」庶民の美学を通じ屈折させる現象を論証する。

『英文学研究・支部統合号』第7巻には各支部から合計5本のルネサンス文学関連の論文が収録されている。『関東英文学研究』からは若手奨励賞（村山賞）受賞論文である菊池翔太‘Relativizers in Shakespeare’s Drama: A Sociolinguistic Study’がシェイクスピア劇において関係代名詞の選び方に性差と階級差が見られるという思いがけない事実を社会言語学的に論証する。性差の比較にロザリンド／ギャニミードを選んだセンスの良さが光る。『関西英文学研究』に掲載された森井祐介‘*Women Beware Women and a Triumph of the Drama(tist)*’はシェイクスピアなど16・17世紀の劇作家たちが楽屋落ち的にこぼす役者による台本の改変や逸脱を接線として、『女よ、女に用心せ

よ』の劇中劇における二重三重に入り組んだメタシアターの仕掛けを解き明かす。

『九州英文学研究』にはシェイクスピア劇と関連する3本の論考が掲載され、奨励賞受賞論文である國崎倫『『ハムレット』におけるモグラ表象』はルネサンス期ヨーロッパのモグラ表象を網羅的に調査し、亡霊をモグラに喩える『ハムレット』の死生観を炙りだす。鶴田学『『リチャード二世』——虚ろな王冠と歴史との対話』は歴史主義的解釈を誘発してきた『リチャード二世』の歪像画的な性質を「英国らしさ」の多義的な表象から指摘する。“native king”という台詞の表現に関する対照的な二通りの解釈に基づく議論が力強い。大和高行「ブルジョワ家庭悲劇の誕生——英国歴史劇と she-tragedy の系譜からみた *The Tragedy of Jane Shore*」はニコラス・ロウ作『ジェイン・ショアの悲劇』がブルジョワ家庭悲劇としてもつ革新性を見事に初演当時(1714年)の演劇史的な時代背景に位置づける成果である。

大学紀要、学会誌等に掲載された論考には以下のものがある(姓名の50音順)——井出新「ロンドン市民社会における国家意識の誕生——リチャード・ロビンソン『アーサー王事績肯定論』(1582)を中心に」、慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻同人誌 *Colloquia* 第35号; 北村紗衣「「シンデレラストーリー」としての『じゃじゃ馬ならし』——アメリカ映画『恋のからさわぎ』におけるシェイクスピアの読みかえ」、新英米文学学会誌 *New Perspective* 第200号; 桑山智成「シェイクスピア演劇における役者の体と生命感——『リチャード3世』『ハムレット』『リア王』について」、京大英文学会誌 *Albion* 復刊第60号; 近藤直樹「政治劇に隠されたフェミニズム——Aphra Behn の *The City-Heiress* について」、大阪府立大学人間社会学部言語文化学科雑誌『言語文化研究・英米言語文化編』第10号; 近藤弘幸「日本最初の『ロミオとジュリエット』——雑誌『喜楽の友』と小栗貞雄」、中央大学人文科学研究所『人文研紀要』第79号; 佐々木陽子「Jane Austen と Shakespeare — *Pride and Prejudice* と *As You Like It* の比較」、法政大学大学院英友会誌『テオリア』第44号; 佐藤達郎「*The Arundel Harington Manuscript* における friendship について」、『日本女子大学英米文学研究』第50号; 西野義彰「*Measure for Measure* における滑稽な人物」、島根大学法文学部紀要『島大言語文化』第38号; 正岡和恵「フローリオとシェイクスピア」、『成蹊英語英文学研究』第19号; 村里好俊「シェイクスピアへの散歩道④ 芝居は人を変えるもの——『恋におちたシェイクスピア』覚書②」、熊本県立大学文学部雑誌『文彩 BUN-SAI』第11号。

また大学紀要に掲載された英語論文は以下の通り(姓名のアルファベット順)——Etsuko Fukahori, ‘Staging *Hamlet* for Japanese Children: Seisuke Yamasaki’s 2014 Production of *Hamlet*’, *The Kwassui Review*, No. 58; Adam Hailes, ‘Embracing Dichotomy: Morality and the Erotic in *Venus and Adonis* and *The Rape of Lucrece*’, *Bulletin of Faculty of Foreign Studies of The University of Kitakyushu*, No. 138.

シェイクスピアの研究

最後に翻訳関係の成果を紹介したい。松岡和子訳ちくま文庫版シェイクスピア全集は昨年度、第25巻『ジュリアス・シーザー』（2014年7月）と第26巻『リチャード二世』（2015年3月）が刊行された。今回はどちらの巻も「訳者あとがき」が訳者ならではの発見を随所に散りばめていて秀逸。由井哲哉（『ジュリアス・シーザー』）と前沢浩子（『リチャード二世』）の作品解説も要を得て面白い。

シェイクスピア劇を含めて16・17世紀イングランド文学一次資料の翻訳は英文学の魅力を広く一般に伝える上で、研究論文と手を携えて二人三脚の重要な役割を果たしてきた。フィリップ・シドニーを精力的に研究してきた村里好俊による以下の3点の翻訳には長年の研究で蓄積されてきた貴重な情報が至るところで示されている——（大塚定徳と共著）「サー・フィリップ・シドニー作『短詩選集』」、『熊本県立大学文学部紀要』第20巻；「サー・フィリップ・シドニー作『アーケイディア』牧歌集（抄）和訳・注解」、『熊本県立大学大学院文学研究科論集』第7号；「サー・フィリップ・シドニー作『アーケイディア』牧歌集（抄）和訳・注解・解説」、『熊本県立大学文学部紀要』第21巻。

（学習院大学教授）